

再び卒業を迎えるにあたって

大学のさまざまなスタッフに面倒・迷惑をお掛けしながらも支えられ、無事に「卒業を迎える」こととなりました。まずはこの場をお借りして、御礼申し上げます。

さて、生物学は小学生時代から苦手科目の筆頭であった。しかし、学校が終わると家にランドセルを投げ出し、裏山に登り、近所の田畑に入り込んで、そこに生きる物に触れ、生きる姿を見るのは大好きであった。いっぽう、高校そして大学では、ただ漫然と無為に日々を過ごしていたのだが、19歳の夏に、将来の進路を決めかねない事態（進学振り分け）が迫ってきた。それなりに悩んだ末に、理学部・生物学科「人類学を主とするコース」を選択した。その理由はいまだ分からないが、それまで存在すら知らなかった人類学という学問がどんなものかを覗いてみようと思立ったのが理由であったような気がする。進学してみると、それなりに楽しい学生生活を送れたので、大学院へと進学した。それなりにすることはして博士課程へと進学したが、このまま過ごして良いものかと思ひ始め、二度ほど退学を真剣に考えた。一年遅れで学位を取得した段階で一念発起し、阪大でオーバードクターを開始。ここでの経験が契機と

なり、その後は迷うことなく研究人生を歩み始めた。また、東大の前期日程ならびに後期日程、そして大学入試センター試験の出題委員をさせて頂くことで、初めて高校生物の教科書にも触れることができた（私が過ごした高校では語学系教科以外では教科書を使わなかった）。この経験があったから、学科内再編成や専攻統合にも違和感なく融け込めたのかも知れない。また、有り難くも若い時から、独立して自由に研究をする場を与えていただいた。若いときはそれなりに頑張ってきたが、次代を担う世代を育てるという大学の使命の前に、いつしか自分を前面に出せなくなった。しかし、記憶に残る若者が多数、研究室に集ってくれ、補って余りある時間を過ごすことができた。

さて、定年が近づくと幾多の方々から「その後はどうされるのですか？」と尋ねられる。質問者の真意を無視した私の返答は、「単著の論文を書きます」。単著論文執筆が実際に可能かどうかは知る由もないが、どんなに小さくても自分自身で科学する喜びを、オーバードクター時代に感じたワクワク感を、オーバープロフェッサーでも感じたいと願っている。



植田 信太郎
(生物科学専攻教授)

見かけによらずフレンドリー

石田 貴文 (生物科学専攻教授)

生物科学専攻の植田信太郎教授がこの度定年を迎えられます。植田さん(と呼ばせて戴きます)は、1973年(昭和48年)生物学科人類学コースに進学、以後、学部生・大学院生・ポスドク・教員として45年の永きにわたり理学部2号館の住人でありました。私が人類に進学した頃、植田さんは博士課程の院生で、実験の手ほどきを受けました。私が実験に失敗すると、「教えられた者が失敗するのは、教えた自分が失敗したのと同じだ」と、私以上に悔しがる植田さんに、厳しい研究者魂を見た気がしました。

ポスドク・助手時代の植田さんが、人類学教室にDNA研究を導入されました。「分子人類学」が幅をきかせる今と違い、当時はDNA研究など

「妄言」と見なされた時代で、たいへんご苦労をされたこととお察しします。以来、分子生物学をツールとして研究を展開され、多くの後進を育てられました。

植田さんはいつも眉間に皺をよせている強面のイメージで、学生からは「こわい先生」との印象を持たれがちでした。表題の「見かけによらずフレンドリー」というフレーズは、学生のレポートに書かれていたものでした。それを読んだ植田さんは、感動を露わに破顔一笑、「世の中には本質を見抜く目をもった人間が居るのだね」と、そのレポートを大切そうにコピーされていました。

これからは、さらに好々爺として後進を温かい目で見守ってください。お疲れ様でした。

「なま暖かいチリなどに包まれて



尾中 敬
(天文学専攻 教授)

当時は黎明期というより、海外ではすでに日が昇ってしまっていたのですが、私が大学院に入った頃は赤外線天体観測がもの新しく、日本でも京都大学を中心に観測が始まったばかりでした。本学に職を得た時はまだ口径8m級の望遠鏡は1台もなく、後に大成果をあげた世界初めての赤外線天文衛星 IRAS (Infrared Astronomical Satellite) も打ち上げられる前でした。私が研究していた宇宙のチリは星の光を吸収したり散乱したりして遮るので、普通の天体観測には天敵のようなやっかい者なのですが、宇宙ではちょうどなま暖かい温度になって、赤外線でもとても光るので、赤外線観測では当時の主役でした。こんな中で、日本で初めての衛星赤外線望遠鏡 IRTS の望遠鏡本体や観測装置の開発に参加する機会に巡り会い、また平行してヨーロッパの宇宙赤外線天文台の観測計画にも加えていただき、なま暖かい宇宙のチリやガスの研究を行うことができました。その後も日本で初めての本格的な赤外線衛星「あかり」(日本の科学衛星のならわしで、当時は ASTRO-F とよばれていました) の開発に多少とも貢献し、本当にほんのちょっぴりですが、すばる望遠鏡の一番波長の長い、なま暖かい赤外線の光を観測する装置の開発にも参加できました。

もっともらしく言うことでもないのですが、自分達で設計して、自分達で組み上げた装置でまだ誰も見たことのない空の光を見るというのは、なんとも言えないものです。ちょうどタイミングで、始まったばかりの衛星赤外線計画に遭遇し、その発展と自分の研究が同期できたことは本当に幸運なことだったと思います。思い出すと、それぞれの装置開発ではいろいろなことがありましたが、今振り返ってみると、月並みですが、あつという間の出来事だったような気がします。大変迷惑をおかけしたのではないかと思います。装置開発のため本郷にいないことが多くても、なんとかしていただいた天文学教室のスタッフの皆様には本当に感謝します。たくさん取れた観測データの解析も、優秀な大学院生や研究員の方がいなければ、進まなかったでしょう。似たような失敗をくりかえしつつ、それでも少しは研究を進められたのは、天文学教室のスタッフの皆さんと学生さんと、それからなま暖かいチリに恵まれたおかげだと思っています。

ちなみに部屋の中のゴミがなかなか片付かないのと同じように、宇宙のチリにはまだまだわからないことが一杯あります。とっても心地よいので、もう少しは、なま暖かいチリに包まれていたいと思っています。

尾中敬先生のご退職に寄せて 田村 元秀 (天文学専攻 教授)

尾中敬先生は、1980年に東京大学大学院理学系研究科で理学博士の学位をとられ、翌年に理学部助手、1995年に大学院理学系研究科助教授、2001年に教授になられました。尾中先生のご専門は赤外線天文学、とくに、赤外線による星間ダストの観測的研究です。日本初の軌道赤外線望遠鏡 IRTS や日本初の赤外線衛星 AKARI の推進をはじめ、海外の赤外線宇宙天文台 (ISO, Infrared Space Observatory)、スピッツァー宇宙望遠鏡、ハーシェル宇宙望遠鏡と言った旗艦赤外線衛星も駆使されて研究を進め、まさに日本の星間ダスト研究の顔として活躍を続けてこられました。なかでも、多環式芳香族炭化水素 (PAH) のような大型有機物が星間物質中に普遍的に存在することを明らかにし、宇宙空間での物質循環の理解に大きな

貢献をされました。開発にも参加されたすばる望遠鏡用冷却中間赤外線装置 COMICS で、がかにβ星のまわりの残骸円盤が太陽系で言う小惑星帯である事、つまり系外小惑星帯を検出したことも大きな発見でした。

尾中研からは数多くの研究者が育っています。雑務でお忙しい中も、院生・研究員と議論をされているのをよく見かけます。その語り口は優しく、かつ、ユーモアに溢れています。海外からも学生等を受け入れ、国際的な環境をつくって来られました。最近では次期大型赤外線衛星計画である SPICA のプロジェクトサイエンティストとしての重責も担われています。これまでの赤外線天文学および当専攻へのご貢献に感謝するとともに、今後一層のご活躍を祈念いたします。

「お呼びでない、こらまた失礼いたしました。」

先日、2018年度の「理学部パンフ」に載せる物理学教室教員の集合写真を撮るということでしたが、「おまえは定年退職なのだから載る権利はない」ということを婉曲かつ丁寧に告げられ少々傷つきましたので本題の言葉を発したところ、「ギャグが古すぎる」と物理教務からお叱りを受けました。定年退職の記念すべき文の掴みはこんなものでいいでしょう。

1974年11月に4番目のクォークであるチャームの発見が米国であり、素粒子物理学が一新しました。当時、本学・物理学科の素粒子関係の先生たちは非常にエキサイトしておられ、これに騙されて素粒子実験の分野に進むことを決心しました。この分野の最先端は当時から大規模国際協同実験が普通でしたので、博士をとってから20年間はハイデルベルク大学 (Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg)、スタンフォード大学 (Stanford University)、欧州原子核研究機構 (CERN) と外国での最高エネルギーの実験に携わってきました。この間多くの友人ができ、いまでも公私でお付き合いをさせて頂いています。1999年に物理学教室に拾っていただき日本に帰ってきました

た。日本に帰ってからは一貫して次期素粒子物理実験のメッカとなる国際リニアコライダー ILC (International Linear Collider) の推進をしてまいりました。2012年にCERNで「ヒッグス粒子」が発見されたのを契機に、ILCを日本に建設することを分野で決め多くの仲間と共に努力しております。現在の「素粒子物理学の標準理論」には重力相互作用が入っておらず、宇宙の暗黒物質も暗黒エネルギーも説明できていません。ヒッグス粒子は標準理論を超える窓で、ILCでのヒッグス粒子の研究におおいに国際的な期待がかかっています。ILCの推進だけでは、将来ILCなどで活躍するであろう大学院生の教育ができないので、超冷中性子の地球重力場での束縛状態の測定、極細電子ビームサイズの測定、ILC用の電磁カロリメータ開発などの小規模実験や測定器開発も並行して行い、若い世代も育ててきました。幸い当該分野では優秀な指導者がきら星のごとく育ておりますので、表題の言葉をいよいよ発せられる時が来ました。理学系研究科のますますの発展をお祈りいたします。理学系研究科教職員の皆様、長い間有難うございました。



駒宮 幸男
(物理学専攻 教授)

闘将・駒宮先生との思い出

浅井 祥仁 (物理学専攻 教授)

「闘将」。駒宮先生を一言で表すとこの言葉以外思いつかない。まだ大学院生だった私が、初めて駒宮先生に会った日の事を今でも鮮明に覚えている。素粒子センター長室で、ジュネーブから一時帰国していた駒宮先生に新粒子探索の件で話した時である。目つきの鋭い怖い先生だなとビビったが、相対論的效果を手で一瞬に評価するインパクトに惚れて、それから25年いつも駒宮先生の後ろにいた。駒宮先生は、とにかく闘った。当時ジュネーブで行われていた国際共同実験 LEP に一緒に参加したが、共同実験は、同時に国際競争の場でもある。世界中から優秀だけども癖のある連中が集まって切磋琢磨する。ルールはあるけれど仁義がない。それが国際共同研究である。そんな

中で、駒宮先生はその実験の現地のボスとして、われわれをまとめ、よく闘った。何故こんなに闘うのかと初めは思ったが、切磋琢磨することでお互いを評価し、闘った後は一番の理解者になる。それが国際研究の醍醐味で、CERNのロルフ・ホイヤー (Rolf Heuer) 前所長などはこうして駒宮先生の一番の理解者となった。

駒宮先生はボスでありながら、いつもわれわれのそばに居てくれた。ジュネーブで夏に、ランニングシャツ着て、うちわでパタパタしながら夜が更けるまで一緒に研究したあの頃が一番楽しかった。コンピューターの画面を見ながら、時間を忘れて議論した日々を共有できたことを感謝しています。

東大とともに歩んだ46年



真行寺 千佳子
(生物科学専攻 准教授)

私は、46年という長い時間を東京大学で過ごしました。駒場で2年、本郷の生物学科で2年、その後修士課程の2年と博士課程の9ヶ月間を本郷の動物学専攻で学び、博士課程1年の12月末退学、1979年1月から助手に採用されました。1995年4月にPI*として独立し、教員1名の小さな研究室ですが、自らの責任ですべてを取り仕切ることのできる体制で、真行寺ワールドの研究「マイクロマニピュレーションを駆使した分子モーターダイニンの特活性解析と鞭毛の振動運動制御機構の解明」を実現し発展させてきました。

小学校の頃から生理学者を志していましたが、東大を受験することになったのはある偶然からでした。雙葉高校3年の4月に日本舞踊の発表会が国立劇場であり、この舞台に立つために日舞の稽古三昧で浪人。受験校を医学部から東大理科2類に変更したのです。4年後の大学院進学先は動物生理学研究室。そして気づいてみれば、ダイニンの1分子生理学と鞭毛の細胞生理学的解析を専門としていました。学生時代にはまだ男女共同参画の意識は低く、不愉快な体験も数多くあり、すべて一人で乗り越えなければなりません。助手・助教授(准教授)の間に、結婚・離婚・父の他界・自宅の建替え・アルツハイマーの母を私単

独で自宅介護・そして11年前に発症した難病の進行との戦い、これらを背負って全力で走り続けてきました。介護と難病の悪化が重なった昨年までの約5年、定年までの継続を危ぶみました。研究室立ち上げから定年まで、個性豊かな思いやりのある学生が、途絶えることなくメンバーとなってくれたことは何にも代え難い幸せでした。彼らは、協調性を身につけ、研究だけでなく、普段のラボ内での会話・役割そして生活全般を私と一緒に楽しんでくれました。この間、支援して下さった事務方、職員の方々にも心から感謝致します。

39年間に1度だけ、東大をやめようかと真剣に考えたことがあります。私の生真面目さが空回りをして耐えられなかったのです。ところがこの時を狙ったかのように、総長室から呼び出しがありました。1999年初春のことです。女性として初の総長補佐就任の要請でした。この体験が、私の東大観を大きく変えました。私の考え方を真に理解してくれる仲間と出会い、広い視野で議論を深め合える人々がいるという幸せを実感しました。と同時に改革の難しさと理学系研究科の貴重な存在も実感しました。国立大学法人法の制定前の嵐の日々を駆け抜けた仲間との絆は現在も続いています。長い間ありがとうございました。

*Principal Investigator

真行寺先生の華麗な東大教員生活に乾杯！

岡 良隆 (生物科学専攻 教授)

真行寺千佳子先生は、本学理学系研究科動物学博士課程に入学直後の1979年1月に動物学教室の第1講座(動物生理学：高橋景一教授)に若手女性教員のホープとして助手に着任、途中1992年に学位を取得、1995年より助教授になられ、2018年3月末のご退職まで約40年の長きにわたって東大教員として華麗に大活躍してこられました。この間、蓮實総長時代の総長補佐、国立大学法人制度検討委員や男女共同参画委員を始めとする大学本部や理学系の委員、文科省における各種委員なども務められました。それだけでなく、研究者としては、修士2年目でウニ精子鞭毛の滑り運動に関する論文を*Nature*に筆頭著者として発表されたのを始め、鞭毛纖毛運動研究の第一線の研究者として活躍され、2002年には猿橋賞と日

本動物学会賞(高橋景一教授との共同受賞)をダブル受賞されるなど、常に輝き続けてこられました。そうしたスマートさをもつっぽうで、実にチャーミングでおしゃれな先生は、若くして助手になられて以来、動物学教室の学生・教員のみならず、国内外の学会などでも無数の研究者からの注目を常に集めてこられました。さらに、実は知る人ぞ知る、お酒にもめっぽう強く、先生とサシで飲みくらべをしてへべれけになった研究者は枚挙に暇がないとの噂です。長い東大教員生活を卒業されるこの春、真行寺先生には、これまでの生活をゆっくりと振り返りながら、おいしいお酒を味わっていただきたいと思います。乾杯！

研究人生の第二章を終えるにあたり

いつの間にかこの日を迎えつつあります。3月31日の最終日に果たして何を思うか自問自答するところです。そこで自身の研究歴を振り返ってみました。研究とは何か、研究テーマをどのように決めるのかをよく分からないまま本学大学院に進学しました。実験をしてデータをグラフにプロットすると、「綺麗なデータだ」と助手の人に言われて、これで良いのかと安心し、投稿した論文がアクセプトされてひとつの達成感を感じ、そして学位を取りました。しかし、さてこれから何をしたら良いのかと迷っていたとき、当時憧れの遺伝子クローニングができる癌研(大塚)に行ける話がありました。そのポストドクとなって初めてクローニングしたのがラット癌細胞のミトコンドリアDNAで、その電気泳動の美しさに感動し、Maxam-Gilbert法のシーケンスバンドを綺麗に出して何塩基も読めたことに満足し、そしてようやくtRNA遺伝子に癌特異的の変異を見つけたときの嬉しさを思い出します。そのようなとき、研究室に届く*Nature*を読んでいて、胸躍ったのが「癌遺伝子の発見」と、次いで「発生を制御するホメオボックス遺伝子の発見」の記事です。次に目指すは癌遺伝子のクローニングと決め、国立がんセンター(築地)のポストドクとなり、ヒト胃がんのDNAでトランスフォームした細胞から新規遺伝子*hsc*(後のFGF4)のクローニングに成功して自信を深め、その成果をもって千葉大学医学部の助手となりました。そこではヌクレオチド合成初段階酵素であるPRPP合成酵素をクローニングし解析して成果を上げましたが、加えて恩師橋正道教授から研究とは何かの真髄を学んだことは、自分にとっては大きな収穫であり、その後の研究指導や本学での学生指導の核となるものです。次に目指すは、英語克服のための「海外留学」

と、憧れの「ホメオボックス遺伝子の研究」でした。それらを叶えたのが、米国NIHのダーウィッド(Igor Dawid)先生の研究室でのアフリカツメガエルの初期発生の研究でした。渡航してまもなくシュペーマン・オーガナイザーに特異的に発現するLIMクラスホメオボックス遺伝子*Xlim-1*を発見して論文にし、さらにその機能を明らかにして念願の*Nature*に論文を2報出して、ようやく研究者として独り立ちする自信を持つに至りました。

1996年に東大に赴任したことで、私の研究人生の第一章が終わり、研究費獲得と学生の教育と研究指導に明け暮れる第二章が始まりました。ここでは、これまで学んだことのすべてを学生や研究員に伝えたいと思いましたが、なかなかうまく伝えられず、もどかしさを感じました。そもそも研究とは言葉で伝えようとして伝えられるものではないのではないか、千葉大時代に橋先生から研究について多くを学べたのは、私自身がすでに経験を積んでいたからではないか。つまり学生自身がいろいろ考え試行錯誤しながら日々実験をして、その中で研究とは何かを自ら感じ取らなければならず、指導教員はそれを少しだけ手助けできるだけではないか、と思うに至りました。この21年余り、多くの学生、研究員、技術員と一緒に研究をしてきましたが、どのぐらい彼らの手助けになったかは自信がないところです。しかし、弟子達が研究しているとき、あるいは学生に教えるようになったとき、私から直接・間接に学んだことや感じ取ったことを活かしてくれたら嬉しいことです。

第二章の最終日には、おそらく終えた解放感と、幾ばくかの寂しさを感じるのではないかと思います。第三章をどうするかを構想を練っているだけのような気がします。



平良 真規
(生物科学専攻准教授)

平良先生のご指導を受けて 近藤 真理子 (附属臨海実験所 准教授)

平良先生の*Xlim-1*遺伝子の論文は、私が初めて研究室のセミナーで紹介したものでした。当時のアメリカは発生に関与する遺伝子の同定が盛んなときで、平良先生の研究は私の憧れでした。先生が帰国された頃に卒業した私は、弟子にしていただけなかったことを残念に思いました。理学部廣報28巻4号にある先生の新任教官紹介が印象深く、『今回が6つめの所属先で、これまでいろいろな研究室で多くの研究テーマと関わることができたことは財産であり、この巡りあわせに感謝している』と書かれていました。このようなご経歴が先生の大変豊富な

知識ととても深い洞察のもとになっているのでしょう。またこの言葉は、沢山の研究室をわたり歩くことになった私にとって大変励みになっていて、移るたびに「新しいことを吸収して成長せよ」と念を押されている気がします。

そして時は流れ、2011年にアフリカツメガエルの全ゲノム解読プロジェクトに誘っていただき、直接の「ご指導」でようやく「弟子」として*Nature*を含め共著の論文が数本出せました。

平良先生が定年を迎えられます。研究者はやめられるわけではありませんので、先生が次におられるところが7箇所目の研究室になるのでしょうか。これからも新しい研究テーマに取り組まれ、私たち後進をご指導ください。

三度目の卒業



中野 明彦
(生物科学専攻教授)

来たる2018年3月23日の学部卒業式に、生物科学の教員を代表して安田講堂の壇上に上がることになった。ガウンを着用するのだそうである。照れ臭いが、一緒に卒業する気持ちになるのも悪くないかとお引き受けすることにした。

私は、1975年に生物化学科を卒業し、1980年に生物化学専攻を修了しているのであるが、当時は安田講堂が使える状態ではなかったし、入学式も卒業式も全学行事としては一切行われなかった。後に、安田講堂の改修が終わり、初めて中に入ったときは、これがつわものどもが夢の跡かちょっと感動したのを覚えている。

1988年に理学部生物学科に教員として赴任した。講師・助教授として9年間在籍したが、研究室主宰教授の定年と共に異動する不文律に従い、1997年に理化学研究所に転出した。その直前の3月、全学広報委員を務めていた私は、卒業式担当として安田講堂の2階席一番前に座って式を眺めていた。私は学生時代に卒業式をやってもらえなかったのと一緒に見ていいですか、と委員長にお願いして許しを得たのである。これで東大ともサヨナラだな、という感慨にふけていたのを思い出す。それが再び本郷に戻り、教授として15年も在籍するとは。

学生時代を含めてのべ33年、私にとって東大とは何であったのだろうか、といま自問自答している。学生時代は田隅三生、宮澤辰雄両先生の薫陶

を受け、講師・助教授時代は安楽泰宏先生にお世話になり、教授になってからも沢山の同僚に支えられてきたが、大きな転機はいつも東大を出たときであったような気がする。学位を得て国立予防衛生研究所（現・国立感染症研究所）に就職したときに、細胞内膜交通という私のライフテーマに出会ったこと。理研で独立したのを契機に最先端のライブイメージングに取り組み、自ら顕微鏡の開発に関わって誰も見たことのない世界に踏み込んだこと。いずれもそれなくして今の私はない。東大の在籍期間は、きっとこれらの新しい仕事を育てて発展させる時間であったのだろう。学生を育てることもとても大事なことで、それがあるからこそ東大に戻ったつもりだが、最後の方はあまりに忙しくて、一人一人の学生とじっくり向き合う時間が取れなかったことを心残りに思う。今回再び東大を離れ、理研で研究を続けることになるが、これをもうひとつの大きな転機として、集大成となる大きな仕事をまとめたものである。

私にとって長年の宿願であった生物化学専攻と生物科学専攻の統合が2014年に実現し、その前後の4年間、生物科学専攻長を務めさせていただいたのは、両専攻を学生としてまた教員として見てきた身には忘れられないこととなった。その評価が定まるのはもっと先になるだろうが、より大きな発展を遂げていくことを心から念じている。

中野明彦先生を送る

福田 裕穂 (理事・副学長／生物科学専攻教授)

中野先生は、東京大学理学系研究科生物化学専攻で学位を取得され、その後、1988年に現・東京大学特別荣誉教授の大隅良典先生の後任として本学理学部講師に着任されました。1997年に理化学研究所主任研究員としていったん本学を離れましたが、2003年に教授として理学系研究科生物科学専攻に戻られました。2000年には井上學術賞、2008年には産学官連携功労者表彰・日本学術会議会長賞を受賞されています。

中野先生は、うらやましいほどに才能にあふれた先生です。生物物理学、生化学、遺伝学、細胞生物学、これらを駆使して研究を展開してきました。また、実験材料でも、酵母、動物細胞、植物と生命の本質に迫るために最適と思われる材料を縦横無尽に使いこなしています。先生の専門分野

は膜交通ですが、ここでも先生のマルチタレントぶりを遺憾なく発揮され、たとえば、日本放送協会（NHK）と共同で動きの速い膜交通を可視化する顕微鏡を開発しています。運営においてもその能力を発揮しています。これまで日本細胞生物学会、日本生化学会、レーザー顕微鏡研究会の会長を歴任され、生物科学学会連合の代表も務められました。特筆すべきは、積年の課題であった、生物化学専攻と生物科学専攻の統合をそのリーダーシップにより見事に成し遂げたことです。

中野先生は、東大定年後も理化学研究所で研究を続けると伺っています。これまでのご貢献に感謝いたしますとともに、今後の益々の活躍をお祈りいたします。

退職にあたって

1975年に生物科学専攻の大学院に進学した頃、所属した植物分類学の研究室が本郷から附属植物園（小石川植物園）に移転し、博士課程在籍中にそのまま植物園の助手に採用されたので、一部の時期を除き延べ35年間にわたって植物園でお世話になりました。また、6期12年間にわたって園長職を務めさせていただきました。

植物分類学の基礎は多様性の認識にあるという指導教員の方針で、修士課程では国内の植物調査を課題とし、博士課程でも国内の植物を扱っていましたが、1978年に中国が解放政策に転じ、現地調査ができるようになったことが、国際的なスケールで研究を発展させる転機となりました。自然がよく残っている海外の奥地で調査を行うためには、共同研究者とチームを組んで行動するとともに、現地の研究機関・研究者と綿密な協力体制を保つことが不可欠です。先輩の研究者が築いた協力関係を引き継ぎ、中国、台湾、韓国、インドネシア、タイ、インド、ミャンマーなどアジア各地で同士を得ることができ、有意義かつ安全で楽しい調査を進めることができたことは本当に幸運であったと感じます。

フィールドボタニストにとって小石川植物園はまさに天国です。居ながらにして、東京大学の研究者らが世界各地から集めてきた生きた植物と植

物標本を好きなだけ観察・調査できる場所であり、また自分たちがフィールド調査で採集した標本を既存の標本と比較検討できる点でも、採集して来た生植物を栽培して成長させ、生活史の一部にだけ見られる特徴を発見することができるという点でも、絶好の研究環境が与えられたことに感謝しています。自分は成果にこだわらず好きな研究対象を見つけて力一杯取り組んで来ただけなので、そのような環境にふさわしい立派な研究ができたかどうか分かりませんが、2017年の国際植物学会議でリンドウ科の若い研究者に出会った時「あなたのツルリンドウ属の研究はバイブルだ」と言って挨拶されたことにとっても励まされました。振り返ってみればそのような論文を幾つかは発表できたような気がしています。

だいぶ前になりますが、戦前の小石川植物園で学生時代を送った老先生が来園され、とても感慨深げに「木が大きくなりました」と言われたことを思い出します。私が知っている40年の間にも、植物園の木は確かに大きくなっています。しかしいっぽうでは風雪で折れたり、立ち枯れたりして、いつの間にか世代交代が進んでいます。そのような植物園独特の時の流れの中ではわずかな期間ではありましたが、植物園で生き、教育研究とともに温室の建替えなどさまざまな懸案事項に対処してまいりました。関係者のみなさまにはたいへんお世話になりました。厚くお礼申し上げます。



邑田 仁
(附属植物園 教授)

邑田仁先生のご退職に寄せる 塚谷 裕一 (附属植物園長／生物科学専攻 教授)

邑田仁先生は本理学部生物学教室・大学院理学系研究科のご出身で、ご専門は植物分類学。1980年に附属植物園の助手、1991年に講師に昇進され、1995年からは助教授になられました。同年、東京都立大学の教授として異動されました。その後、1999年に附属植物園の教授として本学に戻ってこられました。

邑田先生はテンナンショウ属のほか、ウマノスズクサ属、ツチトリモチ属など、少し変わった分類群を扱うことで有名ですが、以前、ご本人から「脈絡がないと言う人がいるけど、ウマノスズクサの花筒でツチトリモチの花序を包めばテンナンショウになる」とお聞きしたことがあります。

フィールドも日本国内のみならず、インドネシアの調査も一時なさっておられました。近年は

日華植物区系に入る地域、とくにミャンマーに力を注いでおられます。この間、附属植物園助教の東馬哲雄博士をはじめとしたお弟子さんを植物分類学の世界に送り込んで来られました。

また2005年には日本植物分類学会の会長に選出されるなど、社会活動にもご貢献しいものがあります。現在建て替え中の大温室については、附属植物園園長としてさまざまな方面との折衝にご尽力されてきました。邑田先生なくしては難題多い植物園の運営は困難ですが、幸い、来年度も特別職で植物園をサポートしていただけることになっています。邑田先生、これからはぜひどうぞ植物園をよろしくお願ひ申し上げます。



邑田先生がご専門のママシグサの花序。仏炎苞が花序を覆い独特の風情を示す。霧島山系で撮影のもの。

このほかにも理学系研究科からは、新藤正夫（経理課経理チーム 副課長）さん、須藤千影（化学専攻 係長）さんが大学を去られます。長い間大変お世話になり、まことにありがとうございました。-広報誌編集委員会-